

宮古通信 1

2011年3月11日のあの日から4年以上が経過した。岩手県沿岸被災地での私の暮らしも3年と数か月。「風化」という言葉がある。全国ネットのマスコミによる被災地の報道は皆無になった。

しかし、ここでは被災した土地のかさ上げ工事で、土砂を積んだダンプトラックや重機が埃を巻き上げて走り回っている。仮設住宅には2万人以上の方が暮らしている。壊れた防波堤の工事がようやく始まった。震災被害はリアルな現実で、私はそこに暮らしている。そして私の前には、あの津波にのまれ命を落とされた方々の遺族がいる。彼らは「今だからようやく話せるようになった」と、愛する人を失った慟哭の日のこと、これからの自分のことなど、生々しいナラティブストーリーだ。私には額に入った1枚の小さな写真に過ぎないが、その方が生きいきと脈動し、確かにこの世に存在していた証のストーリーだ。最愛の妻と息子を亡くし、自暴自棄の時期を過ごした男性。幼い孫と自分の息子を目

の前で流された婦人。小学生の兄弟を失くした母親。突然の不幸に茫然自失の後に来た喪失感、悲しみ、嘆き、自殺念慮をもつまでの慢性的な抑うつ感。「生きているのがつらい、自分が死ねばよかったと思う……」こうやって話せる方は支援につながるができるが、他者との接触を避け、話せない方もまだ多く存在する。



私にできることは彼らの悲嘆をただ傾聴するだけだ。非力な私はそれしかできない。自身の心理的な二次受傷に加え、虚無感と無用感に苛まれる毎日だ。支援者への支援が叫ばれて久しい。私が酒好きだったらきつとアルコール依存症に陥っていただろう。言葉の違いや文化の違いは、ことさら大きなストレスになることも身をもって実感した。

こちらでは毎月11日は「月命日」であり、警察や消防の方々が海岸周辺の搜索を続けている。岩手県内だけでまだ千人以上の方が行方不明のまま。厳冬氷点下10度にもなる厳しい冬期にも続けられている。本当に頭が下がる思いだ。被災は過去のことでは決して無く、今も続いていること。現在進行形であることを皆さんの心の中に覚えておいてほしい。これから時々レポートさせていただきます。📧

宮古太郎

(みやこ・たろう)

震災後、都内から支援機関に単身赴任のヒラソーシャルワーカー